巻頭言

〈小特集〉
デリダにおける「ポレモス」の思想と 20 世紀フランス

La pensée du *polemos* chez Derrida et le contexte intellectuel
en France au XXe siècle

2020 年 8 月 22 日、松田智裕氏（立命館大学文学部初任研究員・当時。現在は国立情報学研究所特任研究員）の著書『弁証法、戦争、解読――前期デリダ思想の展開史』合評会が、脱構築研究会の主催により実施された。この小特集は、合評会での評者三名の発表にもとづく論考と、著者の応答にもとづく論考を収録したものである。

『弁証法、戦争、解読――前期デリダ思想の展開史』（法政大学出版局、2020 年）は、松田氏が立命館大学大学院文学研究科に提出した博士論文（2019 年 3 月博士号授与）をもとに刊行した著書であり、20 世紀フランスの思想状況を踏まえつつ、「戦争」という概念を軸に、ジャック・デリダの前期の思想形成を考察した研究書である。本書はこれまでに複数の書評で取り上げられ、若きデリダ研究者の成果として高い評価を受けている。

合評会には、亀井の司会のもと、小川歩人氏（大阪大学）、渡名喜庸哲氏（立教大学）、松葉祥一氏（同志社大学）の三名にそれぞれ発表をおこなっていただいた。世代の異なる三氏の発表は松田氏の研究をさまざまな視野から照らし出し、その数々の意義およびいくつかの問いを浮かび上がらせた。松田氏はそれに対して真摯に応答をおこなった。その後の質疑応答も含め、デリダの思想形成や当時のフランスの思想動向をめぐって濃密な議論が展開された。この小特集は、合評会での質疑そのままの記録ではないが、基本的には合評会での発表と応答にもとづいた論考を収録している。お読みいただければ、会の充実ぶりが十分に伝わるのではないかと思う。

合評会は、2020年3月頃に発生したパンデミックの影響を受け、オンラインでの実施となった。この巻頭言を書いている現在（2021年10月)、哲学関係の学会やイベントでオンライン開催はすでに一般的となっているが、当時はまだ開催形態を模索していた時期であった。幸い、40名近くの参加者があり、滞りなく実施できたのは、技術補助をしていただいた脱構築研究会の西山雄二氏(東京都立大学)のおかげである。あらためて御礼を申し上げたい。

研究者にとって自著の合評会は、みずからの研究成果を先達や同世代の研究者にしっかりと受け止めてもらい、今後の研究を方向づけるうえで重要な機会である。とくに初めての単著を世に問う新進の研究者にとってその意義は大きく、また、合評会の内容を誌面にて報告することも大切なことであろう。今回、登壇者の方々にご賛同いただき、このような合評会にもとづく小特集を掲載できることを、司会を務めた者として大変嬉しく思う次第である。

立命館大学文学部教授
亀井　大輔